「感謝経済」をめぐる“風景”10

～　暗号資産（暗号通貨）や法定通貨をめぐる宿阿　～
KYC/AML、技術と人間の中の“悪魔”の“永遠の戦い”は続くのか

「悪い人間という一種の人間が世の中にあると思っているのですか。そんな鋳型に入れたような悪人が世の中にあるはずありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それがいざという間際に悪人に変わるんだから恐ろしいのです」

（夏目漱石「こころ」より）

上記は、日本の文豪、夏目漱石の代表作の一つといわれる「こころ」の一説である。この一説の示すコンテクストは、ストリーテーラーの主人公「私」と「先生」との会話の中で「先生」が語ったものであり、人がある日突然、欲望等に突き動かされて“悪人”（的）になる瞬間がある、というテーマ（主題）のエッセンス（本質）として示される。
「先生」は若いころ、親友兼恋敵に対し人格の根幹をもへし折るような言葉を使った意図的な攻撃をしながら出し抜き、その後、自分の人生の内省の中で、ある意味では、“人間が自分の欲のために、ある時突然豹変する動物”であることを様々なエピソードや体験をもとに、若い「私」に伝える。

引用した一説は、人間がお金（おカネ）を前にして、突然目がくらんで、魔が差し、人を出し抜き、ウソをついて人を騙してお金を確保する行動に出る、という可能性があることを切々と訴えた中で出てくるもの、となっている場面である。（この前には親族間の資産をめぐる不透明な不正や骨肉相食む争いを示唆する内容が小説では記されている）
“楽して儲けたい”、“（時に不正をも働き）インチキをしてでもカネ（やカネに準ずる資産的なもの）を確保したい”という現象が時に起きてしまう人間の性、人間の宿阿は、特に、価値のある資産や資産的なものを保有したり、マーケットに侵入して、価値のある資産的なものをくすねるという行為につながる。
デジタル、ネット、キャッシュレス経済の環境においては、それはハッキングという行為で、顧客や関係者の持つ価値のある情報を盗み、それを不正な形で“私物化”するもので、2019 年の夏にも、日本の暗号資産（仮想通貨）取引所で起きてしまった。また、大手流通企業の決済システムにもハッキングがなされ、不正に法定通貨分の資産がくすね取られた、ということが起きた。（この事件のあと、当該の大手流通企業はこの決済システムの事業を取りやめた（2019 年 8 月上旬

© 2019 OKWAVE, Inc.

現在))

古典的な、窃盗、強盗のような犯罪の場合には、物理的な人の動きが伴うので、現行犯であれば悪行の把握はしやすい。その次の段階は主に金融資産等を扱う環境で詐欺的なトランザクションを巧妙に行う場合の犯罪だが、これもトレースが難しい場合もあるが、主に先進国の経済犯罪の捜査能力向上もあり、ある程度は検挙につながることも多い。
一方、インターネット上での不正な侵入によるデジタル（的な）金融資産、金融価値を盗む場合、別名を騙った“なりすまし”などで犯行が行われることが多い。インターネット上の暗号資産等を盗む犯罪の場合、特に複雑な犯行で、その手口が巧妙で高度である場合が多いものだが、基本は“自分が誰かわからないようにしながら、自分の手を汚さずに（自分のそのネット上の手続きやプロトコールへの確認の段階で、足がつかないようにして)、不正に資産（的な価値）を確保して、巧妙にフェードアウトする”と見ることができる。
もっとわかりやすく言うと、司法当局をはじめ世間、世界にバレないようする（していく）犯罪がその本質である。

インターネット上でのフィンテック領域での金融手続き、暗号資産取引の手続きで、現在最も重視されるのが、KYC（Know Your Customer)、AML（anti-money laundering／マネーロンダリング対策）と呼ばれるビジネス上、事業上の概念である。
KYC（Know Your Customer）は金融機関等で新規口座を開く際に要求される書類手続き等の総称をいう。正体不明のものが口座開設した場合、その口座がマネーロンダリングに利用されていても、実態が把握できないため、実在している個人、若しくは会社が口座を開設しようとしているか確認が必要となる、ということで、その確認手続きを差すものである。
また、AML（anti-money laundering／マネーロンダリング対策）は、不自然な取引、振り込め詐欺などの不正口座取引、反社会的勢力やテロ資金、融資詐欺の排除などしていくビジネス実務上、司法/行政面でも使用される概念の総称である。
現在、金融面のフィンテック領域、暗号資産取引の分野で上記、KYC/AML が最も重要といわれるのは、冒頭の引用で、夏目漱石も指摘した「平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それがいざという間際に悪人に変わるんだから恐ろしいのです。」という人間の性癖、宿阿、性が、永久に続くという現実から来ているものである。
この夏（2019 年夏)、アメリカのフェイスブックが事業計画を発表したデジタル

© 2019 OKWAVE, Inc.

通貨「リブラ」の構想だが、「リブラ」が、ここ数年間で世界的に人口に膾炙するまでになった暗号資産やそれに準ずるものに該当するのか、それとも複数のハードカレンシーのバスケット的価値がきちんと担保された“異形”の金融資産的/金融商品的なものになる可能性はないか、等の議論、また、世界の法定通貨の金融システム秩序を破壊して、先進国の法定通貨だけでなく、途上国、新興国での莫大な利用スケールも想定される決済利便性の高いデジタル決済システム通貨になるか、などの議論が大変かまびすしくなってきている。
その一方で、先月（2019 年 7 月）に行われたアメリカ議会での公聴会では「マネーロンダリング（資金洗浄）の対策は大丈夫か」が徹底的に質問された。また、多くの評論家なども、新たなデジタル通貨やデジタル通貨（的な）の新事業には、簡単に言うと「なりすましやマネロンは絶対起きないんだろうね」ということを“疑念”として提示する。要するに「サイバーセキュリティ対策は十分なのか」である。
デジタル技術をベースとした経済活動、決済実務は今後世界中でもう不可逆的な状況に入ることは間違いない。（特殊といえば特殊だが、路上で露店で肉まん一つを買うにもスマホがないと買えない状況にまでなってきた中国は、世界有数のデジタル決済の国である）
しかし、一方で、マネーロンダリングにもってこいの「現金」も法定通貨を中心に「価値」は認められ続ける。（おカネに色がついていないので、キャッシュそのものは、誰がいつどこでまとめて“札束”にして、だれがどのように所有権を移転させたのかをトレースしにくい）（件のデジタル通貨構想「リブラ」も法定通貨の「現金」と常時交換可能な設定になるなら、「リブラ・現金」交換業も成立する）
デジタルの分野では、特に情報管理に対して、分散してすべてのデータが保管されるデータベースを型作り（形作り）で、途中のプロセスでのデータや情報の改ざんが行われないようにするブロックチェーン技術が注目されているが、夏目漱石の指摘する「少なくともみんな普通の人間だが、いざという間際に悪人に変わる」こと、最初から確信犯でハッキングする“確信犯的人間”も世界中からいなくなることがないと想定される中、KYC/AML 関連のサイバーセキュリティ技術の向上、技術革新は、人間の宿阿、人間の性との“終わりなき戦い”“永遠の闘い”になるという想像は容易いことであり、その展開次第で、不可逆的に進むデジタル経済とその手続き等の分野/領域で、“悪人の侵入”を許さない決定的な世界標準の技術&手続きがどう作られるのか、また、どうすれば、世界中の人々が安心してスマホだけで経済生活を進めることができるか、は、サイバーセキュリティ技術の向上にかかっているということになる。

© 2019 OKWAVE, Inc.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【株式会社オウケイウェイヴ　ミッション（企業理念/目的）】

互い助け合いの場の創造を通して、物心両面の幸福を実現し、世界の発展に寄与する

◇◇◇

株式会社オウケイウェイヴは 2018 年 4 月、より多くの人々が活躍できる社会を目指した新たな経済圏『感謝経済』の考え方と、その実際的な経済活動具現化のためのプラットフォームを開発した。2019 年夏までに、この事業にすでに 100 社を超える企業や団体が参画し、新たな概念の事業に注目していただいている中、できるだけ中立的に、「感謝」と「経済」、「互い助け合い」と「経済」の在り方、新たな社会と経済の在り方などを、『「感謝経済」をめぐる“風景”』と題して、コラムを連載し、所感や考察などを示していく。

◇◇◇

大山　泰　　オウケイウェイヴ総研　所長

1961 年東京生まれ。一橋大学経済学部卒。株式会社フジテレビジョンで経済部長、経済担当解説委員、等を歴任。BS フジ「プライムニュース」など報道番組で経済解説を行う。内閣府/公正取引委員会「競争政策と公的再生支援の在り方に関する研究会」、農水省「政策評価第三者委員会」など、複数の政府の有識者会議等の委員を歴任。

© 2019 OKWAVE, Inc.